平成19年 第1回
教育委員会定例会会議録

平成19年1月9日(火)

港区教育委員会

港区教育委員会会議録

第2230号

平成19年第1回定例会

日 時 平成19年1月9日(火) 午前10時04分 開会
場 所 教育委員会室

「出席委員」	委 員 長	五味原 康
	委 員	小 島 洋 祐
	委 員	澤 孝一郎
	教 育 長	高 橋 良 祐
	委 員	横 矢 真 理
「欠席委員」	な し	
「説明のため出席した事務局職員」	参事(庶務課長事務取扱)	小 池 眞喜夫
	教育政策担当課長	堀 二三雄
	学 務 課 長	安 部 典 子
	生涯学習推進課長	佐 藤 國 治
	図書・文化財課長	宮 内 光 雄
	指 導 室 長	藤 井 千恵子
「書 記」	庶務課庶務係長	阿 部 祥 子
	庶務課庶務係主事	荒 川 正 行

「議題等」

第1 教育長報告事項

- 1 ブックポストの設置について
- 2 生涯学習推進課11月事業実績と12月事業予定について
- 3 図書館・郷土資料館の11月行事実績と12月行事予定について
- 4 指導室指導室12月行事予定について
- 5 その他

第2 協議事項

- 1 港区における生涯教育の施策の方向づけについて
 - (1) 学校教育の環境整備について
 - ・学校選択希望制の見直し(案)について
 - (2) 社会教育の施策について

「開 会」

五味原委員長 おはようございます。

改めておめでとうございます。本年もよろしくどうぞお願いいたします。

昨日は成人式、ご苦労さまでございました。ありがとうございました。

それでは、ただいまより平成19年第1回港区教育委員会定例会を開会いたします。

(午前10時04分)

「会議録署名委員」

五味原委員長 本日の署名委員は、澤委員、お願いいたします。

第1 教育長報告事項

1 ブックポストの設置について

五味原委員長 それでは、日程に入らせていただきます。

日程第1、教育長報告事項。

1、ブックポストの設置について、図書・文化財課長、お願いいたします。

図書・文化財課長 では資料ナンバー1にもとづきまして、ブックポストの設置についてご報告をさせていただきます。

自宅や勤務地等から図書館に遠い利用者の利便性の向上と、利用者拡大の一助とするために、生涯学習センター(ばるーん)の入口付近にブックポスト、図書の返却ポストを設置いたします。

設置台数は1台。A5版で約140冊程度が入るポストを用意する予定でございます。

それから、利用方法でございますが、区立図書館から借りた図書資料を返却することができるということでございます。

CD・ビデオ・DVDにつきましては、図書館のブックポストと同じように対象外とさせていただきます。

利用時間でございますが、原則、常時返却ができます。年末年始につきましては回収ができませんので、この期間は利用できないようにいたします。

それから、本の回収方法でございますが、1日1回、回収をいたします。

次に、開設の時期でございますが、2月1日返却開始を予定しております。

利用者へのPRでございますが、広報みなと、みなとマンスリー、図書館ホームページ、それから行事カレンダー等のチラシでお知らせしてまいります。

以上でございます。

五味原委員長 ただいまの報告につきましては、いかがでございますか。

澤委員 なかなか便利そうなことだと思うのです。こういうことをやろうというきっかけは、利用者の方から、返すのが不便だとか、そういう何か要望みたいなものもあったのですか。それとも図書館側でこうした方がいいというような独自の判断ですか。

図書・文化財課長 図書館基本計画を策定する際に、公募委員に2名入っていただいたり、さま

ざま検討してまいりました。そうした中で、自治体によっては駅にブックポストがあるところもあるというお話が出てきました。区でも駅のそばにそういうポストがあった方がいいのではないかと
いうご意見がありまして、図書館基本計画の中に順次、可能なところにブックポストを設置する
ということで計画計上させていただいて、18年度予算を計上したというもので、調整をして、生涯
学習センターに置いていただくことになりました。

五味原委員長 ほかにいかがでございますか。

横矢委員 この回収の方法なのですけれども、どういう方が担当されるのかを教えてくださいま
すか。

図書・文化財課長 今現在も各図書館で、例えばみなと図書館にはないけれども、赤坂図書館に
ある本があると、予約をされて、それを赤坂からみなとに運ぶ貸し出しの協力車というのを業者委
託で、毎日運行してございます。その車を1日1回だけ、生涯学習センターのポストのところに行っ
てもらって、引き揚げてくる。引き揚げてきたものを、それぞれの図書館にまた戻すという形で実
施するものでございます。今の段階では、年間契約をしております、その範囲の中で回っても
らえる予定といたしますか、そういうことで考えております。

五味原委員長 ほかにいかがでございますか。

小島委員 新しい制度ですけれども、区民の利便性は高くなるわけですから、今後実績を見て、
利用者が多ければ、さらに適切な場所にこのようなポストを置いていただければと思います。その
辺はいかがですか。

図書・文化財課長 ポストの設置だけですと、経費的に約70万円でございますので、利用状況
を見ながら、適切な場所があれば配置を考えていきたいと考えております。

澤委員 今のお話ですと、回収は現在すでに定期的に動いている便を利用するということなので、
それが今の現状、2月1日から1カ所寄るところがふえるぐらいは、何も経費はかからないという、
そういうことになるのですか。

図書・文化財課長 年度契約ですので、3月いっぱいまでは一応現在の業者さんと話をした中で、
その程度は今の中でやれるということだったものですから、契約変更しないで、基本的には内容の
変更だけをしていただくということで実施をしたいと考えています。

それから、新年度については、それをもとに仕様書をつくって、また入札になりますので、その
辺は受託業者と調整が必要になります。

横矢委員 仕様書を出すときにもう既にブックポストをいくつかふやすような発想で出されるの
ですか。

図書・文化財課長 今現在ふやすという前提で仕様を書くまでに参りません。あと、交通状況、
渋滞の関係とかいろいろ考慮する必要もあるかと思えます。

新年度については、今現在すぐにこことはまだ特定できておりませんので、仕様上はブックポ
ストで1カ所、それからこの間報告いたしましたテンブル大学にも回っていただくということもご
ざいますので、その辺は仕様には入れておきたいと思っております。

教育長 今、図書を1回借りると平均の返却日数とか、そういう調査というのはしているでしょ

うか。

図書・文化財課長 きちんとした調査、分析はしていませんけれども、図書館に毎日いらっしゃる方もいるのです。そういう人は1冊ぐらい持って、借りて返している、そのような感じでやっているのかなと思うのですが。まとめでの方は割と期限いっぱい借りるという方が多いです。

教育長 それによって、図書館の運営が、ある意味、困難とまではいかないけれども、難しくなっているとか、そういうことはあるのですか。

図書・文化財課長 返すのが遅れるから困難にという意味合いですか。それは特段ないです。そう言いますのは、蔵書が全部戻ってきてしまうと、結構スペースはとりますから、個人のお宅に分散していれば、それだけということも逆に。

教育長 結局人気のある、今話題に上っているような図書、この問題なのでしょう、きっと。苦情もあるではないですか。

図書・文化財課長 教育長がおっしゃるとおりで、そういう本は早く返してもらえれば、またそれが回転します。本当に旬の期間というのがあって、その間にそれだけ回れば、返却ポストがその部分では役に立つのかと思います。

五味原委員長 これは、もっとも返却する場所というのが一番大きなポイントになると思うのです。図書館まで行かなくて、常に利用者が通りかかる場所、頻度の多い場所にあるならばということになると思うのです。この辺十分検討して設置しないと、置いても何もならないのではないのでしょうか。図書館に行っても変わらないというのではだめだと思うのです。

ほかにございますか。よろしゅうございますか。

2 生涯学習推進課 12月事業実績と1月事業予定について

五味原委員長 それでは次に移らせていただきます。

2番、生涯学習推進課 12月事業実績と1月事業予定について、生涯学習推進課長、お願いします。

生涯学習推進課長 それでは、資料番号の2番をご覧ください。

まず1ページ目は、12月事業実績と1月事業予定表でございます。キッズテニス、キンボール等が並んでございます。12月3日の三田地域スポーツ教室です。4人ということですが、これは10時から12時ということで当初お知らせしていましたが、急遽午後の2時～4時と変更になり、時間をずらしたということで、人数が少なくなったと聞いております。

続きまして、2ページをご覧くださいと思います。こちらは放課後児童育成事業平成18年度参加児童数、12月実績分でございます。トータルでは4,306人ということでございます。

12月は若干冬休みの関係で、11月比では数字が少し落ちているということでございます。

続きまして、3ページでございます。平成18年度スポーツセンター利用集計表でございます。12月分、こちらは今年の12月と比べてほぼ同じような数字で推移しております。ただ、合計につきましては、昨年在34万5,803人ということで、5.26%、平成18年度は率が伸びているということでございます。

続きまして4ページ目、最後のページでございます。平成18年度運動場等利用集計表でございます。こちらにつきましても、12月につきましては若干ふえている。大きな理由としては、芝公園多目的運動場、こちらがふえている要因ということでございます。合計につきまして、昨年、旧芝プールが4万418人ございました。その関係で、トータルでは落ちてございます。ただそのプール分を除きますと、元・三田中学校プールが今回入っていますけれども、それらプールの数字を除いた形で比較した場合は2.67%ふえているということでございます。

月例の報告については、以上でございます。

五味原委員長 ただいまの報告につきまして、いかがでしょうか。

澤委員 スポーツセンターが5.3%で、運動場関係、プール、三田プールという特殊事情がありましたけれども、それを除くと3%弱ぐらいということで、利用者がふえているということはあるがたいことなのですから、これは最近の人口増とリンクしているのですか。

生涯学習推進課長 そこまでの分析は行ってございません。ただ、高齢者等の利用がふえていますし、健康ブームというようなこともございまして、運動場を使う方がふえているのではないかと思います。

澤委員 いずれにしても、大都会のど真ん中で、区の運動場を初めとしたこういう施設は非常に重要なので、ますます利便性の高い状態に持っていくようにしていただけるとありがたい。うちの地元のだれかが言っていましたけれども、介護保険も大事ですが、こういうスポーツ施設をたくさんつくっていただいた方がいいと。なるほどそういう考え方もあるかなと。だから、ぜひともこういう施設は充実する方向でお願いしたいと思います。

小島委員 芝公園のフットサル場の件数と人数はゲートボールの件数もこの中に含まれているのでしょうか。

生涯学習推進課長 基本的に多目的運動場ということで、フットサル以外の使用、ゲートボール等もできるのですが、まだこの段階ではゲートボールの件数が入っているということはちょっと聞いてございません。ほとんどフットサルということです。

小島委員 今澤委員がご指摘になったから、どのぐらい利用しているのかなと思ひまして。

フットサルは人気があって抽せんになっているのですか。

生涯学習推進課長 主に土日、夜間、こちらはやはり100%埋まっていることで、抽せんという形でやっています。

教育長 残念ながら、昼間は100%埋まっているという状況ではありません。

小島委員 何かもったいないですね。相当のお金をかけてやっているわけだから。昼間どういう利用法があるか検討したらいいですね。

教育長 今、小島委員がおっしゃったように、ゲートボールができるのですから、ゲートボールはお年寄りですから、休日ではなくても、平日の午前とか午後に使えるわけですから、その辺のPR等を積極的にするべきだと思います。

小島委員 フットサル場でもゲートボールはできるのですか。

生涯学習推進課長 ちょっと仕様を変えれば可能です。

小島委員 それでしたらどんどん積極的に。

教育長 オープニングセレモニーのときにも、フットサルとゲートボールと両方ありました。あそこはできるようになっているので、ぜひそういうPRをしっかりとすべきだと思います。

澤委員 団塊の世代がいよいよ定年を迎えるわけです。港区はそれでも高齢化しているのですから、昼間に利用していただくようなことは大事ですね。

五味原委員長 今でもゲートボールのプレーヤーというのはい多いのですか。ふえているのですか。一時期に比べると、何か少し下火になっているような気もするのですけれども。

教育長 あと保育園とか幼稚園、私立なども運動場に困っているようなところだってあると思うのです。そういうところに午前中もう入場料など取らなくていいから、そういうところで積極的に貸してあげるとか、人工芝ですから危なくないので。そのようなことも少し考えた方がいいですね。何も使わないのはもったいないです。

生涯学習推進課長 委員ご指摘の点について、ゲートボールのPRもこれからやっていく形にしたいと思います。それから保育園、幼稚園等そういった、多目的運動場ですと、体操をやったりですとか、いろいろな使い方ができると思いますので、そういった方面にもちょっとお声かけしていきたいと考えております。

五味原委員長 放課GOの土曜日は別として、現在の登録者に対して、実際に、参加されているお子さんは、何%ぐらいなのですか。

生涯学習推進課長 まず2ページの表をご覧くださいなのですが、今12月現在で、例えば青山ですと68名の登録がございます。こちらで12月の平均である21.9、約22人を割り返しますと大体32.2%となります。

五味原委員長 大体みんなそこへ行っていると見ていいのですか。

生涯学習推進課長 学校によって若干違いはあるようです。こうようですと約20%弱、なんざんだと月曜日から金曜日の平日が27.5%、土曜日になりますと10.2%に落ちてございます。しばですと33.7%、土曜日ですと6.5%まで、9.32%が6.5%になります。それからひがしまちですと16.6%、あざぶですと36.5%、みたですと23.9%と、それぞればらつきはあるという形になっております。

五味原委員長 確かに数字でもらっていますからわかるのですが、ばらつきについて、これ新しく始めてきた事業ですから、ばらつきがあるというのは、何が原因なのか。この辺は十分に考えていかないと、これから先の各校でやる放課GOに関して考え方をする必要があるのではないか。当初のころは登録人数が何人いるというのを盛んに気にしていたわけですがけれども、これからは、これだけの実績ができてきたということになると、以後やる地域的な問題なのか、時間的な条件なのか。この辺を一度検討してみる必要があると思うのです。

生涯学習推進課長 これから分析して研究していきたいと考えておりますけれども、12月現在の登録児童数が、在籍の児童数に比べて、登録率が、例えばひがしまちですと105人のところを101人が登録していますので、96.2%ということになりますので、それで参加状況を割り返すと例えば16.6%になります。そういう関係で、登録数が例えばあざぶですと190人のと

ころ107人の登録で、登録率としては56%ということです。それで参加者数を割り返して36.5%ということですので、その辺の数字の補正的なものは1回してみる必要があるのかなと。ちょっとならしてみても、どのような参加率になるのかということも一つ課題ではあるのかと考えております。

五味原委員長 時間の問題と。これは要望でございますが、一度、これからのためによく分析しておいていただきたいと思います。

教育長 今の委員長のお話と同様に、利用者、子どもが利用しているわけですがけれども、子どもの声、あるいは利用させている保護者の声、あるいは学校ですから学校の声、そういったアンケートというか、そういう声というか、そういう聴取はどのようにしておりますか。

生涯学習推進課長 放課GO を始める際に参加の希望、あるいはどのようなことをカリキュラムで望むか、そういったメニューを調べるためのアンケート等は実施しております。

教育長 今、現状、1年やって、2年やって、3年やってということですよ。あおやまはもう3年目ですよ。2年目のところもあるし、今年やっているところもある。そういうところでの利用者の声をちゃんと聞いているのかですか。

生涯学習推進課長 今あおやま、あるいはこうようですと活動委員会、その他の学校ですと協議会という形で、まちの方が入って、PTA等が入った会があります。その中で、例えば放課GO サポーターということで、子どもたちを見守る、要は親御さんであったりする方の声をその場で聞きして、いろいろな声を挙げてもらって、高学年が退屈していますよという声を、ではどうしていきましようかというような、そんなような形で声を聞いているというところがございます。

教育長 そういうことではなくて、直接アンケートをとるなり何なり、子どもの声を直接聞く、あるいは参加させている親御さんの声を聞く、あるいはそれを見守っている学校の声を知る。そういったことを丁寧にして分析をする必要があるのではないかと、委員長の考えにあると思うのです。その辺を適切にやってもらいたい。

五味原委員長 そういう意味では、例えばあおやまの場合、現在68人が登録している。そして開設日が16日。これのうち、出席簿のようなものがあるのか、何か資料があるならば、一つの学校でも結構ですから、一体何割のお子さんが、例えば16日のうち10日以上来ているお子さんがどのくらいあるのか、この辺を見極める必要があるのではないかと。先ほど、課長が言いましたけれども、ひがしまちですか、母体の90%以上が登録しています。これはその学校の雰囲気とそのときに雰囲気で、登録は関係ないと思うのです。

例えば登録人数が少ない中には、うちは積極的に登録を呼びかけなかったところは、おけいごとをしたり何かをしているから、もう初めから登録をしないということもあります。友だちが入っているのだから僕も入ろうということで、登録だけはしているというのがあると思うのです。

ですから、一体開設日に対して、登録者のうち何割のお子さんが、例えば70%来ているのか、50%来ているのか、この辺を分析する必要があるのではないかと。その上でいろいろ検討をしていく、これからの検討の基礎にしたらいかがですか。

横矢委員 登録しているのに参加をやめた子の意見というのでも聞きたい。参加をしている人の意

見ただけだとわかってこないところに何かあるのではないかなと思いますので、そういうものを探しておくべきかなと思います。参加をやめた子の意見と、あと下校なのですけれども、地域で守っていくにしてもちょっと帰りが遅くなっているはずで、途中で下校する子どもたちもふえているはずですので、そのあたりの調査を一度していただけたらと思います。

生涯学習推進課長 まず、委員長のおっしゃるとおり、登録をしている子のどのぐらいが参加している、そういった参加状況をもうちょっときめ細かく分析していく必要があるかなと思いますので、今後の課題にしたいと思います。それから横矢委員がおっしゃるとおり、参加をやめた子の声、そういったものも少し何かの形で事情を聞いていく必要があるのかなと思います。あと下校の関係も少し考えていきたいと思います。

横矢委員 お願いします。下校は特に重要な課題、今後の展開をする上でも大きな課題になると思いますので、何か盲点になっていることはないかななどを洗い出していきたいと思います。

小島委員 今回の関連で、子どもたちは一緒に帰るのですか、それともさみだれ的に帰るのですか。

生涯学習推進課長 一応30分単位でまとまって帰る。例えばランドセルを4時帰りの子、4時半帰りの子、5時帰りの子と、その帰る時間帯を決めておいて、ランドセルを帰る時間帯ごとに置いておくなど、工夫をしています。

横矢委員 それは全校同じようにしてあるのですか。

生涯学習推進課長 同じような方式をとっています。

横矢委員 ただ割と出入りは自由ですね、学童と比べて。この日はおけいこなので、3時に返りたいという子どもは帰すということがとられているのですか。そのあたりの流れがうまくいっているかどうか調べてください。

五味原委員長 ほかにいかががございませうか。よろしゅうございませうか。

3 図書館・郷土資料館の12月事業実績と1月事業予定について

五味原委員長 それでは、次に移らせていただきます。

3番の図書館・郷土資料館の12月事業実績と1月事業予定について、図書・文化財課長、お願いします。

図書・文化財課長 それでは、資料ナンバー3をご覧ください。まず、図書館行事実績表ということで、1、2ページでございませうが、12月分の実績です。12月は図書館、それぞれクリスマス会ということで、子ども会を開いておりまして、2行目のところに赤坂の200人、それから同じ2日でございませうが、港南で71人と33人、それからみなと図書館は9日の土曜日に50人、それから17日になりますが、三田図書館で101人、55人とそのようなことで、クリスマス会のときは参加者数が多いございませう。

それから2面にありますけれども、高輪図書館で227人、そのような状況でございませう。

それから3ページが1月の予定でございませう。1月6日から31日まで、それぞれ行事がございませう。ちなみに6日の土曜日、みなと図書館でのおはなし会は20人ということで予定してございませうが、この日はすごい雨でひどい日だったことと、それからお正月明けということで1人しか来

なかったということでした。お父様とお子様、男の子。1人だったですけれども何とか楽しんで帰っていただいたという報告を受けております。高輪の「美女と野獣」が何人かまではちょっと把握しておりませんが、そのような状況でございます。1月の行事をきちんとやっていきたいということでございます。

それから4ページになりますが、10月から12月の3カ月分の図書館の利用集計、予約数、それから利用登録者数の推移ということでございます。

それから5ページは郷土資料館の方になりますが、12月。12月4日に文化財の保護審議会を開きまして、委員の委嘱をいたしました。それから10月20日から12月3日まで特別展、浮世絵の展示をしておりましてけれども、これが終了しております。参加数は3,409人ということで、これは10月から通算の参加数でございます。

それから6ページ、郷土資料館の1月の予定でございますが、1月10日から23日まで5回にわたりまして、古文書教室。これは文化財系の非常勤の文化財調査員が講師となりまして実施をいたします。

それから7ページ、1月の展示でございますが、これは12月から今月の17日まで、平成18年度に指定いたしました文化財3件につきまして展示をいたします。なお、増上寺の木造仁王像についてはパネル展示ということでございます。

それから8ページでございますが、テーマ展ということで、あわせて平成17年度に新たに収集いたしました資料の展示もしてございます。これは4月18日までの予定でございます。

簡単ですが、実績と予定でございます。

五味原委員長 ただいまの報告については、いかがでございましょう。

小島委員 クリスマス子ども会はたくさんの方が参加されていますよね。どれも人形劇団のようですが、何か集まるように工夫をしているのですか。

図書・文化財課長 広報みなとですとか、図書館のチラシですとか、そういうことで周知しております。人形劇というと結構人気があって集まっております。それからみなと図書館は親子クラシックコンサートということで、どこも人形劇ばかりだといけないので、これはプロの3人組の方にバイオリンとか弾いていただいております。

小島委員 人形劇団ポポロというと、いや、余計な話ですけども、法学部では、憲法の講義で歩ポロ劇団事件という基本的人権の大事な判例を教わります。ポポロというのは大変懐かしい名前です。

五味原委員長 ほかにいかがでございますか。よろしゅうございますか。

4 指導室指導室1月行事予定について

五味原委員長 それでは、次に移らせていただきます。

4番の指導室1月事業予定について、指導室長。

指導室長 資料ナンバー4をご覧ください。1月の指導室の事業がここに出されております。23日には区パイロット園研究発表会で、中之町幼稚園で「幼少の発達と学びの連続性」とい

うことで発表がございます。また26日金曜日には、区の研究奨励校として、港南小学校が「意欲的に学び確かな読みの力が育つ指導法の工夫」ということの発表を行います。また、24日には赤羽幼稚園、赤羽小学校の学校訪問がございますので、どうぞよろしく願いいたします。

以上でございます。

五味原委員長 ただいまの報告については、いかがでございますか。特別ございませんか。よろしゅうございますか。

5 その他

五味原委員長 それでは、次に移らせていただきます。ほかに何かございますか。

指導室長 その他の件で1点ご報告をさせていただきます。白金小学校の問題についてでございます。今日から3学期が始まりまして、新しい新年ということでございますが、欠席している子どもにつきましては、まだ登校できていないという状況がございます。

また、加害者と言われている子どもさんにつきましては、いじめた事実というのはなく、転校ということを考えておりましたが、それは子どもの気持ちを十分配慮しながらしていくということで、そのまま現在の白金小学校で今日からまた登校を始めたというようなことになっております。

また、今これからのことといたしましては、いろいろ出てきた内容につきまして一つ一つ事実を丁寧に確認し、それを積み上げてまいりたいというふうに考えて、その対応に努めているところでございます。

以上、報告させていただきました。

五味原委員長 ただいまの報告については、いかがでございますか。

小島委員 この件は双方のお子さんの、言ってみれば、人権にかかわる大変重大な事案ですので、学校も指導室もその辺を十分配慮して、今までどおり適切に対応していただきたいと要望いたします。

五味原委員長 問題が問題でございますから、今の状況ですと、もう少し我々としても状況を見ながら次のことを考えざるを得ない、その1点だと思えます。

第2 協議事項

1 港区における生涯教育の施策の方向づけについて

(1) 学校教育の環境整備について

五味原委員長 それでは、日程第2の協議事項に移らせていただきます。

1、港区における生涯学習の施策の方向づけ、学校教育の環境整備について、教育政策担当課長、お願いします。

教育政策担当課長 本日のところは継続協議でお願いいたします。

五味原委員長 それでは、次に学務課長、お願いします。

学務課長 学校選択希望制の見直しについて、本日資料を用意しておりますので、ご議論いただきたいと思っております。

資料ナンバーは5になります。それと本日、席上配布で「魅力ある区立学校づくりのためのアンケート調査報告書について」というタイトルのA4、3枚のものをお配りしております。これは以前、各委員の方にお配りしているかと思いますが、こういったアンケート、平成18年10月発行の概要版の中から、学校選択にかかわる部分について抜粋をしてお配りしていただいたものです。

それでは、ちょっとご説明を少し加えていきたいと思っております。

学校選択希望制につきましては、昨年9月26日に1回ご議論をいただいております。その際、事務局の方から見直し案という形で、二つ大きくくりで案を示しております。一つが、学校の特色を理解する児童・保護者の入学を許可してはどうか。その具体的内容として、保護者から一定の誓約をとったりしてはどうだろうかという案をご説明差し上げました。二つ目の案として、支所単位での選択制にしてはどうかという案を説明いたしました。これにつきまして、各委員からのご意見をお聞きしたところ、どちらも一長一短があって、決め手となる案ではないのではないかというご議論であったかと思っております。

それを踏まえまして、今回、魅力ある区立学校づくりのためのアンケート調査報告というものも出ておりますので、これの中から保護者の意向という部分について、少しご覧いただいた後、事務局が考えました見直し案についての基本的な考え方についてご議論いただけたらと思っております。

まずは、今日席上配布しております「魅力ある区立学校づくりのためのアンケート調査報告書」をご覧いただきたいと思っております。この中の関係する部分だけをピックアップして説明してまいりますので、よろしくお願いいたします。

この調査報告書につきましては、2歳、4歳、10歳、12歳の保護者あてにアンケートを実施したものです。

まず、2歳児からまいります。2歳児につきましては、全体数で685の回答数を得たものでございます。これにつきまして、2歳児の2になりますけれども、学校選択希望制についての考えを聞いております。現行の学校選択希望制を継続するかということでございます。学校選択希望制についての考えを尋ねたところ、続けてほしい、どちらかといえば続けてほしいという継続意向というのが全体の73%、502人、全数が685人のうち、502人の方が継続意向を示されまして、全体で73%の方が継続の意向を示されております。

内訳としまして、2歳の段階ですが、区立小学校への進学希望者は330人いらっしゃいまして、全体の48%の方が継続希望です。私立・国立・他への進学を希望されている方は158人いらっしゃいまして、全体の23%が継続の希望となっております。

続きまして、4歳児でございます。4歳児は、アンケート総数といたしましては、629が返ってきております。この中から、次のページになりますが、3番として、学校選択希望制についての考えというところでお聞きしたところ、継続意向である、続けて欲しい、どちらかといえば続けてほしい、合わせた数ですが、全数が629のうち469人、全体の75%の方が継続を希望されているということです。内訳としましては、区立小学校への進学希望者数が307人で、全体の49%、私立・国立・他への進学希望者数は140人となっておりまして、全体の22%が継続希望となっております。

続きまして、10歳児でございます。これは現在の小学校5年生になります。現在の小学校5年生は、現行の学校選択希望制の制度前のお子さんです。ですので、小学校段階では、基本的には学区の学校へ通うという制度の中で入学された方たちです。この方々で、2番です、全数としては509ございました。アンケート総数としては509ありました。区立小学校における学校選択希望制について、継続の意向を示されておりますのは327人で、全体の64%です。内訳としましては、区立小学校の在籍児は全体の53%、272人です。私立・国立・他への在籍児は140人で、全体の9%となっております。

ここで、将来通わせたい中学校というのが出てきます。これのうち、区立中学校を選択するというお子さんが、全体が509名おりますが、181人の36%となっております。

次をおめくりいただきたいと思えます。

次、小学校5年生ですので、区立中学校における学校選択希望制ということについても聞いております。区立中学校を選択するという保護者の方は、全体の36%しかいらっしゃいませんでしたが、区立中学校における学校選択希望制について継続を意向する、継続を希望される方は400人、全体の79%、約8割の方が希望しているということでございます。私立中学校への進学を希望されている方が多い中でも、区立中学校において学校選択制は継続してほしいという要望はかなりあると考えております。

区立小学校在籍児の内訳としましては、区立小学校に今在籍している方は、全体の66%。私立・国立に在籍しているお子さんに関しましては53人ということで、全体の10%という形になっております。

続きまして、12歳児になります。これは今の中学生でございます。アンケート総数としましては538ありました。その中でも、今後は高校へ進学していくという段階ではありますが、2として区立中学校における学校選択希望制について継続意向を示しているのが424名の、全体の80%近い数です。区立中学校在籍の保護者の方ですと、全体の36%。私立・国立・他の学校に在籍している保護者の方ですと、全体の40%となっております。現在、私立・国立に在籍しているにもかかわらず、区立中学校において学校選択希望制は続けてほしいというアンケート結果となっております。

このアンケートを眺めて全体と言えることは、保護者の方は、アンケートから判断すると、現行の学校選択制については、一定程度継続を希望されているということで、おおむね現行の制度については支持を受けているのではないかという考え方を事務局としては持っているところでございます。

続きまして、本日配布しております資料ナンバー5をご覧くださいと思います。

そうした保護者の意向がありますが、地域の子どもは地域で育つのが望ましいのではないかという考え方も、一方で議会等から指摘されている事実もございます。そうしたこともありまして、今回学校選択制の見直しについて（案）という形でございます。まだ、たたき台の段階ではございますが、学校選択制についての基本的な考え方をどうしていこうかという部分のご議論をいただきたいと考えております。

1の基本的な考え方としては、通学区域制度の原則は維持をしたまま、学区の学校に就学をしていただくというのが基本的な考え方としてあります。しかしながら、子どもの個性に応じた学校選び、特色ある学校づくり、保護者の選択制に対する意向、こうしたことを考えると、学校選択希望制の制度は維持するというのが妥当ではないか。

学校選択制の内容につきましては、現行制度が一定程度支持されているということとしまして、現行制度をそのまま維持していくのはどうかと考えております。その理由としては、小学校は、現在隣接区域選択制になっておりますが、ここでお子さんの通学上の安全、地域と学校のかかわりといったものを重視していくと、やはりあまり広範囲からの選択というのは望ましくはなく、やはり隣接区域程度が望ましいのではないかと。中学校におきまして、現行は自由選択制となっております。これはやはり公立学校への就学率の向上という目標もございます。また、魅力ある中学校づくりといったものを重視していくということ。あと、生徒の通学上の体力的な負担というもの、一定程度のある成長しているところから、対応は可能ではないかという理由から、現行制度を維持するのが望ましいのではないかと考えました。

2番目で運用上の変更点の視点とあります。以下五つほど視点を出しております。これはやはり現行の制度を維持するとはいっても、やはり地域と学校のつながりというのを一定程度確保すべきではないかという部分もございます。学校選択制度を維持しつつも、地域と学校のかかわり、地域の子どもの地域で育てるといった部分をどう確保していくかということを中心に置きまして、運用をどういうふうに見直していこうかといったものを視点として挙げたものでございます。

本日この視点についてご議論いただきまして、そのご意見を聞きながら、具体案の作成を今後行っていきたいと思っております。

まず1点目ですが、抽せん対象者の再選択をどうするかということでございます。現行では、1回希望票を出していただきますが、抽せんの結果、なかなか入れそうにないという形になった場合、再選択、隣接の学区であれば、ほかの学校を選ぶことも可能となっております。いわば第2希望を認めている形をとっております。抽せんを一度経た後、結果が希望の学校にならなかった場合は、学区内の学校に戻りなさいということに限定してはどうかと考えてみました。

2点目としては、兄・姉の優先枠をどうするかという視点です。現行は兄・姉がいるということで、優先的に入学できることになっておりますが、兄弟のいないお子さんとの抽せんにおける公平性といえますか、バランスはいかかなものかというところを挙げております。地域の学校であれば、兄弟・姉妹は確実に同じ学校に入学できるわけですので、選択といったときに、兄弟と別々になるということも含めて、選択という形をしてはどうだろうかということを考えております。

3点目ですが、途中転入者について学校選択希望を可能とするかどうか。現行につきましては、新入学にかかわらず、転入者についても選択を認めております。ただ、他区では途中転入者は選択の認めない区も実際あります。その理由としてですが、途中から途中転入者が入ってくるということで、学校運営上、支障が生じる場合も出てくるということです。そういう支障が生じる可能性があるので、具体的に受け入れる場合は、指定校変更制度で対応していくというものもありました。また、他の区では防災や地域での活動等、まとまりという意味から、せっかく他の地域から転入し

てきた方が、ほかの違う隣の学区の学校に行ってしまうと。地域とのかかわりという部分を重視して、学校選択制は認めていないという区もございます。そういったことをどういうふうにか考えるかということです。

4点目は、通学上の安全確保の徹底という視点ですが、これにつきましては、基本的には選択制で来られる方のお子さんの安全確保は保護者の責任によるのが基本ではないかと考えております。これが第一義的にはあるのではないかと。もちろん学校もやはり責任はありますので、そうした視点から、学校と地域の連携で、通学路の点検等の強化を図っていくというのはどうであろうかということです。

5点目としては、小規模校への支援策のあり方でございます。やはり小規模校、現在、その支援としまして、教育委員会では、活力ある学校づくり検討会というのを各学校に立ち上げさせて、魅力ある学校づくりについて議論をいただいているのですが、学校単位での取り組みでは限界があるというのも事実だと思います。そこでもう少し教育委員会全体として、どういうふうにか小規模校の良さというものをPRしていくかといったところについても考える必要があるのではないかと。これを挙げさせていただいております。

続きまして、ページをお開きいただきたいと思います。

2枚目には、前回の教育委員会で資料請求のありましたものについて、おつけしております。

学校選択制は平成15年から導入されてきましたが、子どもの数というのがどういうふうにか変化してきたかという部分を資料として出させていただきます。

平成10年度との比較でいけば、全体としては、小学校は約4%弱の増加。中学校は約4%の減という形になっております。

小学校で見えていきますと、大きくというかふえた学校というのは、赤羽、港南、港陽でございます。港南、港陽につきましては、人口増加地域という理由でふえているということでございます。

一方、児童数が大きくというか減少に動いているというのは、芝浦、三光、麻布、南山、東町という形になっております。ただ、芝浦は今後、芝浦アイランドへの入居が予定されますので、ここについては、今後ふえる要素はあると思っております。

一方、中学校の方ですが、ふえた学校としましては、やはり六本木でございます。減った学校といたしますのは、高松、港南、朝日、赤坂、青山という形になっております。

もう1ページお開きいただきますと、港区立小・中学校就学状況の推移という形でお示しております。これは平成元年から平成18年までの統計数値になっておりますが、下のグラフの方をご覧くださいと思います。白抜きの棒グラフが住民登録者数、学齢人口ということでございます。色がついた棒グラフが、そのうち公立に在籍している児童・生徒数ということです。就学率が折れ線グラフという形になっております。

平成元年から、小学校の方で見えていきますと、平成12年あたりを底として徐々には人口数もふえておりますし、在籍児童数も増加していっているところでございます。就学率の方は、今のところ81%程度まできているということでございます。

中学校の方でございますが、これも表の見方は同じでございます。中学校の方は、平成17年が

人口としましては、底になるのかというふうな動き方をしております。今後、小学校を卒業して、中学校に入ってくるお子さんたちがふえてくる可能性もありますので、ちょっと動き方は、もしかしたら今後少しふえていくのかもしれないですが、在籍児童数は右に下がっているという形になっております。就学率につきましても、平成17年に一たん上がりましたが、ちょっと平成18年また落ち込んでいるという状況にあります。

以上でございます。

五味原委員長 ありがとうございます。ご意見・ご質問等どうぞ。

小島委員 先ほどのアンケート調査で70%から80%ぐらいは選択希望制を継続してもらいたいと、これはかなり高率なのですね。前回、前々回にも聞いたのですが、このように高い率で支持されている選択制について、見直すという主な理由をもう一度お聞きしたいのですが。

学務課長 1点目としましては、資料ナンバー5の下にもつけておりますが、平成15年から制度を運用してきて、一定程度課題も見えてきているところもございます。検討課題が特定の学校に集中するという。抽せんの結果、希望どおり実際入学できていない状況も見受けられるということです。その一方で、制度導入により、小規模化が進んできている学校もあるということです。3番目として、児童の登下校時の安全確保及びその徹底も求められているということです。あとは地域の子どもと地域の関係の希薄化が懸念されているということが課題としてあります。

また議会としては、学校選択制度を否定するものではないけれども、地域と学校のかかわりというものはかなり強いものがあるということ。それと地域の子どもは地域で見守って育てる。ほかの区域のお子さんが入ってくると、地元の方は知らないということもございますので、そういった見守りの機能ということを見ると、地域と学校のかかわりというのはかなり強いのもあります。そうした視点も考慮するべきではないかというご意見はいただいているところでございます。

小島委員 理由はよくわかりました。ここが検討課題の点ですね。これは見直したらどうかというご意見をいただいたというのですが、主にどういうポジションというか、どういう方々からそういうご意見が出るのでしょうか。例えばPTAの方からそういう意見が出ているとか、あるいは全体の感じる雰囲気からそういう意向が出ているということでも結構です。

学務課長 議会からは先ほど説明した形でございますが、保護者の方はPTAとの懇談会を通して聞いてみますと、学校選択制は否定しないのですが、自分の地域からどのぐらいほかの学区に散っているのかもわからない。他の地域から入ってくるお子さんに対してどういった支援ができるのかというのはなかなか難しい。学校選択制というもので地域と地域のかかわりがなかなかとりづらくなってきているというのも事実としてあるので、その点を少し見直していただくと良いのではないかという意見はいただいております。

小島委員 PTAとか保護者の方から、地域とのかかわりとか、そういう観点、その他から、選択制は維持して結構だけれども、運用上もう少し検討する必要がある、運用上の課題があるのではないかというようなことですか。

五味原委員長 要するに、このアンケートの中で、70%の方が選択制を支持している。これはあくまでもこれから学校に入る、既に入っているという片面から見た部分ではそういう答えが出て

いるわけですね。通常、支援してくださっている地域からの意見としては出ていない。アンケートには対象になっていない。したがって、我々の耳に入ってくるのは、二つの側面から意見が入ってきているというのが現実ではないかと思うのです。

ほかにはご意見はいかがですか。

澤委員 今の小島委員の質問にも関連しますけれども、実際にお子さんをこれから通わせる、あるいは通わせている保護者等からは、今委員長が言われたように70%を超えるような支持を得ているということで、この制度は基本的に継続するということは一番妥当な方針だと思うのですが、今日の学務課長の資料を見させていただいて、我々教育委員会としては、一つ残念な数値が出ているかと。

と申しますのは、この学校選択希望制というのは、区立学校の魅力の一つつけるという意味でも導入したらどうかということがこの制度を導入する前の議論であったのです。それも私などが賛成した大きな理由なのですけれども、最後のページの全小学校、全中学校の就学率を見ますと、平成15年度から、小学校などもどんどん就学率が減少しています。小学校の場合には、減少しているとは言っても80%強の子どもたちが区立学校に来ているので、分析する必要はあるけれども、やむを得ないのかという感じもしないでもないのです。

中学校の場合は、平成17年に上昇したということで喜んだのですが、残念ながら平成18年度は減っているというようなことです。ちょっとこの数字、この傾向を見ると、支持はいただいているのですけれども、区立学校の公立の魅力につながるような結果が出ていないようなことが非常に残念な感じはして、ちょっと今頭をひねっていたところなのです。

小島委員 各小学校の魅力、一番親御さんの関心は学力なのですけれども、そういう点、選択制は寄与しているのではないかと思います、それと就学率をどう考えるべきなのでしょう。

教育長 この表を見ると非常に愕然とするというか。これは上に統廃合とか学校希望選択というのがあるので、これは非常に参考になるのですけれども、もう一つ今度は下に世の中の教育の動きみたいなものを添えらるともっとおもしろい。

例えば平成12年のところは、新しい学習指導要領が実施され、学校週5日制。と同時に学力低下問題というのがその辺で起きた。と同時に公立の中高一貫教育、これは都立学校もそうですし、お隣の千代田区もやりましたけれども、公立の中高一貫校ができて、港区も昨年度随分ここに食われているのです。公立主流なのだけれども、中高一貫に選択して行っている子がいます。それからもう一つ、小学校の方でいうと、有名私立大学が小学部を設置してきました。それから、今までは女学校、女子部だけだったのですけれども、男女共学にしている小学校が非常に多くなっているのです。今まで男子校だったものが男女共学、あるいは女子校だったものが男女共学。そういう意味で、有名私立大学の系列化がどんどん進んでいる。小学校の低下というのは、そこが物すごく大きいのではないかと思います。

澤委員 急にですね。

教育長 そうなのです。それから区内でも順心学園が来年から男女共学になります。そういうふうに世の中の制度と同様に、教育の動きというものを下に入れるとやっこの辺がはっきりしてく

るのではないかという気がします。

それから、下のグラフなのですけれども、このグラフは大きな誤りがありまして、よく今統計上、いろいろなことがあります。これ数学的に全く誤っているグラフなのです。というのは、縦軸に5,000から始まっているのです。5,000から始まって1,000単位でこうなっているわけです、左の全小学校。そうすると、このグラフの上り、角度というものは極めて不合理なのです。下に5,000があるわけですよ。

五味原委員長 そうですね。

小島委員 このグラフのつくり方は何か目的があるのではないのですか。

教育長 ここが5,000から書くとこういうふうになって、全くなくなってしまっているのではないかとと思われるようなグラフになってしまう。右側もそうです。右側の中学校はこのままで行くと何年後にはなくなってしまうのではないかと。ところが下には1,500があるわけです。そんなものも含めて、このグラフの書き方というのはしっかりしないと、しっかりするか波線にするか何かやらないと、この角度だけで、非常に新聞などを見ている、こういうものをあおる統計資料の使い方というのが出てしまうわけです。だからこの辺もちょっと外に出す場合は考えないといけないと思います。

小島委員 ですから、区立の小・中学校の学力が上がったとか、あるいはこういう点で前よりもよくなったというようなものがあるはずなのです。だから選択制の後、各校長先生はかなり生き生きと、張り切っている、ちょっと言い方はオーバーかもしれませんが、学校の雰囲気、がらっと変わったような感じがしました。これはいいなという感じで受けとめていたのです。

澤委員 これも中学も今年度、平成19年度ですか、次年度の今の6年生がどういう結果が出るかということはまた一つ大きな関心事なのですが、たまたま平成18年度下がったのか。

小島委員 逆に言うと、選択制を採用していなければ、もっと下がったという議論があるかもしれません。

澤委員 そういう議論もあります。今の教育長のおっしゃった情勢ですと。特にさっき学務課長が説明されたアンケートの2歳児の学校選択希望制についてのアンケート結果ですが、括弧の中は502人の継続意向の方のうち、学区域外はいいのですけれども、私立・国立・他への進学希望者が158人、全体の23%ということは、要するに、うちの公立には行きたくないという数ですよ。23%もあるのという。

五味原委員長 これは大きいですよ。

澤委員 これは全体の数ではないけれども。だからそういう私学志向があるのだ。

五味原委員長 それはやはり港区のある意味での地域的な特色ではないかと思うのです。先日の私立幼稚園の保護者の所得を見ても、ほかの地域では考えられない内容になっています。

澤委員 だからちょっと学校選択希望制のとはちょっと外れた視点ですが。

五味原委員長 いや、でも、それは大切なことです。基本的なものを分析して、その上で次を考えるから。

澤委員 そうですね。ですから今残念ながらこういう就学率という数字でいくと、必ずしも学校

選択希望制の効果がプラスには出ていないかのように見えますけれども、別の面で評価できるようなデータといえますか、そういうものがあるのかどうかということも、学務課長、ちょっと知恵を出してもらえますか。

小島委員 意図的につくって。

澤委員 いやいや、そういう意味ではなくて、客観的なデータとしてあるといいかと。いずれにしても、私の考えでは、学校選択希望制は今後も基本的には維持する。ただ、今の地域との密着性と、それからもう一つ課題に出ている兄弟枠、優先枠ですかね、これはどうするのかという、検討課題として事務局から出されておりますけれども、この辺の一つ一つの課題にどう対応するのかということが非常に重要です。特に地域との密着性ということについては、何か知恵がありますか。

五味原委員長 一つわからないのですけれども、この案の中で、案の2番の3、現行では転入者についても選択可能。もうちょっと細かくというか。

学務課長 例えば2年生なり3年生、4年生、5年生でもいいのですけれども、新入学以外で1年生に入るとい以外で、例えばほかから転居してくる場合がございます。当然、学区域の学校が基本になるのではありますが、転入した段階で、小学校であれば、隣接の学区域も含め、受け入れに余裕がある場合には選択を認めている。

五味原委員長 余裕がある場合はね。例えば、赤羽とか白金のように、抽せんがなされたところについては、どのような取り扱いをするのですか。

学務課長 抽せんがなされて。

五味原委員長 なされて決まっている。

学務課長 そういところについても学年が上がっていくと余裕が出てくる場合もございますので、選択も可能な場合もございます。

五味原委員長 その辺の問題点だね。それはちょっと何か。転居していくと、皆さんが抽せんしたりしているのに、いかがなのだろうか。

学務課長 抽せんのあったところは、1年間は学区域外からの転入はとめています。2年目以降は、その学級の状態を見て判断しております。

五味原委員長 この案について、いかがでございますか。

小島委員 一つ一つやりますか。

五味原委員長 一つずつ参りますか。

小島委員 それの方がいいですね。(1)から。

五味原委員長 (1)の抽せん対象者の再選択をどうするかという問題ですね。これは今なされている方法は。

小島委員 登録期間中に辞退すればという、この意味をもう一度。

学務課長 現行では12月に抽せん対象校は抽せんを行います。12月に行いますと、それから以降、例えば赤羽の学区域内に転入してくる方もいるので、ぎりぎりの学級編成の時期、2月とか3月ぐらいまで待たないと、学区域内からの入学者が固まらないわけです。ですから、学区域外からの希望する方は、2月の半ばごろまでは登録期間という形で設けまして、抽せんは最終的に学

区域内の人数が固まる時期を見計らって、空きがある人数について登録順位の早い方から入学を認めていきますというやり方をやっているわけです。ですから、12月の抽せんではがらりと引いて決まるわけではなく、兄弟枠から外れた方については登録の順位をつけます。

小島委員 引いたときに決まるというものではないわけですね。

澤委員 補欠順番の上位から順番に決めていくわけですね。

学務課長 そうです。補欠の順番みたいなものです。それを決めます。その順番が早い方から、学区域内の転入状況を見ながら、学区域外からの抽せん者を入学者として決定していかどうかとこのを判断して、決めていきます。そこで登録順位が遅いと、例えば登録がもう例えば100人ぐらい集まってきていて、その枠がもう2、30しかないと思込まれるときに、50番、60番の登録順位になっていたらもう無理だと保護者が判断することもあります。そうした場合、例えば赤羽の登録を辞退して、自分の学区域ではないけれども、周辺のほかの選択可能な学校がありますから、余裕のある、そこを希望する。いわゆる第2希望です。当該学校はやめて、次に希望する学校を選択することは余裕があればできます。そういったことは今認めています。

五味原委員長 もしAという学校が本当の学区域内である。Bという学校を選択しました。けれども、ここを途中で登録をやめて、Cという学校に選択をかえる、これは可能だということですね。

学務課長 Cに余裕があれば、可能であるということです。

五味原委員長 Cに余裕があれば。

学務課長 抽せん校になっていれば、それは無理です。

五味原委員長 もうだめなわけですね、選択できない。

学務課長 抽せん校にならず、余裕があるようであればオーケーということです。実態としては、今抽せんになっている学校は特定の学校ですので、大体それ以外の学校であれば、選ぶことができるような状況にはあります。

澤委員 これは制度の運用上、現行でいいのではないかという気がするのですが。制度の運用上、現行では何か問題があって、2番目のマルのように、抽せんを一度したら、その学校を辞退したら、もう学区域内の学校しか行けないというようにする何か理由はあるのか。これが何で問題なのか。

学務課長 第2希望を認めるという形になると、地域にいつまでたっても子どもを引き戻せないというのです。そうすると、第2希望を認めるという現行の運用をやめて、必ず地域の学区域に戻ってきてください。1回は選択は認めるけれども、二つ目の選択は認めません。

五味原委員長 それが本当かもしれません。

小島委員 価値観をどこに求めるかで全然違います。結論は変わります。

教育長 これは学校選択希望制を実施というからには、1回だけで2回目は筋が通らないという気がしないでもない。だからどこを平等にするか、平等感というのをどこに持つかということだと思のです。この兄・姉優先枠というのもそうなのですけれども、これも平等という概念をどの辺で線引きするかということにかかわってくるのではないかと。ある意味で言うと、優先枠、では、兄

弟がいない子はもうそういうものは全く優先がないわけですから、これはもう平等ではないと言われれば、そういうことですね。だから難しいです。

学務課長 視点につきましては、地元と学校、地域と学校との結びつきをいかに強くしていくか。課題にありますけれども、の部分で地域との関係の希薄化が懸念されているところをいかに戻していくかという部分からの視点で挙げたものです。他区例を見ますと、第2希望は認めないという運用をやっている区も実際はあります。ただ第2希望を認める区も当然ありますので、まさに価値観の問題です。

五味原委員長 全体を見ると、今までの運用の内容その他から見ていくと、問題点がある、平等性に欠けるというのは今のその部分です。100%ではないけれども、ちょっと平等性に欠けるのではないかと。特に兄弟・姉妹枠というのは、1人が通過すれば権利をとってしまったみたいで、どうもこれは不平等な部分ではないかと考えられます。それから3番目の途中転入者についても、例えば抽せんまでして入ったところに入れるわけでしょう。

学務課長 可能性もあります。状況に応じて。

五味原委員長 可能性があるだけ。

学務課長 あいていれば。

五味原委員長 例えば1年生で6月に来ました、転居してきました。

学務課長 抽せんがあった年はだめなのですからけれども、2年、3年、学年を進行させていく間に学級の状況が変化していく。

五味原委員長 では、例えば希望して入ったけれども、親が転勤になりました。あきがありました。そうすると、たまたま転勤して来られれば、そこに入れるわけ。

学務課長 1年間はだめです。

五味原委員長 1年間は何が何でも。

学務課長 とめています。

五味原委員長 現状はとめているわけですね。そうすると、抽せんまでしたけれども、枠が余ったまま、1年間はそのままということですね。

学務課長 はい、行きます。2年目以降は学級も変わってきますので。

小島委員 いよいよ難しいね。

澤委員 ですから、1番のことにしましては、私の個人的な意見では、教育長が言われているように、学校選択希望制というのをとっているのだから、仮に抽せん後であっても、可能性がなくてほかの学校に行くのがたまたま隣接校であるというのはやむを得ない気がします。

小島委員 第2希望で入れた人というのは実数として、実際何人ぐらい。どの程度、地域に戻せるかという話ですから。

五味原委員長 現実にはどうかは知りませんが、あるケースを考えてみれば、初めからこの学校には、自分の学区域の学校には行きたくないという中には、ただ学校を選ぶというだけではなくて、ほかの事情によって、どうしてもこの学校には行かせたくないという、親同士の関係とか何かしらあって、ここへは行かせたくない。よそにわざわざ来たけれども、抽せんになってしまった

というのもあるだろうから、そうすると今度は指定校変更か何かで、それなりに理由をはっきりさせてきて、受けるか受けないかの話になるのではないかという気もするのです。

横矢委員 1番は、私も抽せんは一度落ちたところでは、かなりがっかりした失望感を持たれると思うので、そこでもうここしか行くところはありませんと言われたときに、区立自体がちょっとどうよというふうになってしまいそうな、親心としてはそういうふうになってしまいそうな不安を感じます。なので、やはりもう一度選択の可能性を今のままで残した方がいいように思います。

小島委員 横矢委員のご意見を聞いていると、戻すどころか、私立に行ってしまった方が。

横矢委員 そういうふうになってしまうと。

小島委員 いろいろな考えが出てくるものですね。なるほど、そういう考えもあるか。

五味原委員長 どちらにしましても、今日結論を出すわけではございませんので、いろいろな意見を聞きながら、検討してまいりたいと思います。

小島委員 考えるといろいろな問題点が出てくるものですね。

澤委員 では(1)はその程度にして、今度(2)にいけますか。

五味原委員長 兄・姉優先枠。これはどう見ても私は不公平に思うのです。これはただし、もしこの枠をやめるとするならば、ある程度の周知期間がいると思うのです。

指導室長 済みません、ちょっとこの件で。私が去年いたところは、やはり移行期間を設けていました。何年間はお姉さん、お兄さんがいるけれども、もうそれ以後は認めませんというやり方をしていました。そうすると次の子が抽せんに落ちてしまった場合は、上の子も一緒に転校するという例がどんどん出てきました。それは保護者が子どもをどう教育するかということにかかわってきます。

五味原委員長 いや、だから移行期間をどれだけ置くかだと思うのです。6年間置くのか、5年。どちらにしても途中。それでも同じことです。下の子が抽せんで漏れれば、上が一緒に転校するという話になるかもしれません。

小島委員 その場合、2人とも私立に行ってしまうという可能性が。

横矢委員 あると思います。

小島委員 兄・姉がいるから優先だというのは確かに平等の原則に反しますよね。これは抵抗のないような方法で廃止するよりほかないです。

五味原委員長 これも今のように、抽せんで入りたいという希望者が多くなったから。当初のころはそんなに気にしなかったわけです。

小島委員 むしろ親御さんの負担を考えれば、優先してやっていいではないかという考え方。

教育長 一部の学校では当初から問題になっていました。だけれども、こういう制度がなかったのです。その後の指定校変更手続で申請して、そしてお願いしたり、そういうケースが結構あったのです。入れてくれないと、保護者に負担が多いというようなことで。しかし、こういう制度がある以上は、それも一つの選択だと思うという考えはあったのです。そのことをわかっていて選択をするのでしょうかということも言えると思うのです。

ですから、最初はなかったものを昨年度からこれを導入したのです。導入した結果、やはり不公

平ではないかという、そういう意見もあることはある。ただし、現状選択制にかかわる保護者からの苦情とかクレームみたいなことはあまりないと聞いていますけれども、どうなのでしょう。

学務課長 実際、保護者の方から兄弟枠で入れなかったという話は、兄弟枠があるために自分の子どもが入りづらかったということで、兄弟枠に対する制度に対するご意見というのは少ないです。

教育長 余りに保護者は、兄弟が離れ離れになって通うというところは大変だよ、だからそれは理解するとそういうことなのではないかと思います。

五味原委員長 指定校変更という手続の仕方がある。その内容については、区切りがしっかりしていないということが一つです。

教育長 ですからこの(2)のマルの4番目。優先枠を変更する場合には、指定校変更の基準の見直しも当然やらねえとおかしいことになってしまいます。

小島委員 今、抽せんしたら、その1年間は入れないというのは、指定校変更においてもそういうふうになるのかしら。落ちた人が指定校変更による申請をしてきた場合はどうするのですか。

学務課長 指定校変更自体は、学校に受け入れる余裕がなければ、受けることはできません。

五味原委員長 受け入れ枠がなければ、それは不可能なわけですね。

小島委員 今の抽せんの1年間は受け入れ枠なしということでもいいのですね。

五味原委員長 そうすると、例えば抽せんで1人入りました。次の年はよその学校にいる上の子を、例えばお店を営んでいる、学校が終わったらお店の方に来ている、仕事が終わったときに一緒に家に帰るから、それでは2校に行くのが困るから、抽せんで入った方のお子さんと同じ学校に指定校変更してくれと言われれば、枠があれば認めるし、枠がなければだめということで、絶対だめということになるのですか。

小島委員 またつまらない質問して申しわけない。兄・姉ではなくて、同じ年の双子の場合はどうするのですか。1人が受かって1人がだめということもあるのですか。

五味原委員長 1人が受かれば、1人は兄弟枠に入るのではないですか。

小島委員 兄弟か。

五味原委員長 そういうことになるの。

小島委員 では三つ子はどうですか。

五味原委員長 抽せんになっている学校で、ちょっと数値が前に出ていると思いますけれども、具体的にどのくらい兄弟枠で、といふことになるのですか。

小島委員 三つ子でしたら、3分の1で入れてしまう。

五味原委員長 2人というのが結構あるから、でも50%は別々になってしまいます。

学務課長 もう一度説明し直します。平成18年4月の入学の実績でいきますと、赤羽小学校は受け入れ上限数が70です。それに対して、学区域内の予定者数として56を見込んで、枠としては14しかない。そこに合計で51名の方が学区域外からの希望として入ってきました。51名のうち20名が兄弟。

澤委員 兄弟を持っていなければ、自動的にアウト。

学務課長 31名が兄弟のない方です。この場合どうしたかと言いますと、この20名について

は受け入れをしました。その結果、学区域内からの入学予定者が56名と学区域外からの兄弟枠で20名で76になりますので、上限数を超えます。ただこの20名については入れますという形で措置をしています。

この兄弟ではない方の31名という方は、一応抽せんを行っています。これはもしも仮にあきができた場合の登録順位、補欠の順番という形で番号を振っていきます。この通学区域内の入学予定者数56名に対しても、確実に来るかどうかというのは、その後ちょっと変化してくる部分もございます。そうした部分もありますので、学区域外の兄弟のいない方の31名についても一応抽せんをやると。ただ、なかなか厳しい状況にあると思います。

横矢委員 兄弟枠がふえたことで上限が6名も超えていますよね。そうなってくると、辞退者が何人ぐらいふえたところから入れるようになるのですか。

学務課長 今76ですので、受け入れ上限数が70ですから、70まで減ってくれば、70まで減った上で、なおかつ、69名、どこか他区へ転出するとか、ほかの学校へ行くことになったとかそういう理由で、69名になった時点で1人余裕が出ますので、そこで1人ようやく入れます。ただ、現実的にはそういうのは難しいとは思いますが、そういったことをやっています。

教育長 ただ、その70というのは、あくまでも10人余裕を見ている数字で、これは学区域内に3月31日までというか、4月1日というか、そこまでに転入する見込みというか、転居してくる人を入れなくてははいけませんので、その枠として10人枠をとっているわけです。その近辺になって、もう埋まらない状況があったときはどうするのですか。

つまり70でとめていますよね。今は76という数字になっているけれども、例えば4人分あいていますよね。でも学区域の内に転入者がなかった場合、その4人枠というのは埋めるのか埋めないのか。

学務課長 埋めません。

教育長 ということは70人でも埋めません。

学務課長 埋めません。

澤委員 ということは1クラス35人。40が一応上限だけれども、40はとらない。

教育長 なかなか線引きが難しいです。どこで切っているか。本当に3月31日になったらどんどん10人来てしまいましたということになると、先に入れて、認めておいて、後から入ってきたらそれは認めませんというわけにいかないのです。ですからそういうことですね。

学務課長 1年生、学年が始まって、学区域内に転入して来るともありますので、上限数で入れると、途中から3学級にするわけいけないので、ある程度の余裕を持って4月を迎えないと非常に学級運営上、厳しい状況は出てくると思います。

教育長 途中でふえても、学級数はふえませんが。

小島委員 ちょっとしつこいようですけども、その31人の中から兄弟枠なんて冗談ではない、不公平だという声はなかったのですか。

学務課長 基本的には、そういうお声はありませんでした。事前に兄弟枠優先ですよというのはよく周知しておりますので、そこは前提として選択されているのだと思います。

横矢委員 70を超えて6人オーバーするくらい兄弟枠がいたということは、漏れた方たちはご存知なのですか。

学務課長 それは全部周知しております。

横矢委員 それでも苦情は出なかった。

五味原委員長 これはどうもまだまだいろいろなケースを勉強してみないと、なかなか1回や2回では考えられないです。

小島委員 (3)は先ほどやったのでしたね。あと(4)(5)をやらないとあれですよ。(4)(5)もやったのでしたか。

五味原委員長 まだですね。(4)(5)については、いかがですか。

教育長 これはどういう意味ですか。説明を。

学務課長 (4)につきましては、検討課題の中で、選択希望制によって、通学距離が大分延びてくるところもございますので、登下校時の安全確保について、より一層の徹底が求められているというところに対応したものでございます。基本的に教育委員会、学校も含めて教育委員会で行うことというのは限りがあるということもあります。通学路を点検したり、不審者、緊急配信メールをやったりと、防犯ベル対応したりとか、いろいろ教育委員会、学校を含めて、安全対策をやっているところはあります。しかしながら、実際登校してくるといのは、なかなか子ども自体を追いかけていくわけにはいきませんので、保護者の責任によるのは第一義的ではないかと思っております。

また下校時、下校後の子どもの行動範囲もかなり広がりますので、どこまで教育委員会で児童・生徒の安全というのを確保していくのかというのは難しいものも実際あります。一定程度保護者の責任によってお願いするのが基本ではないかというふうに考えております。

とはいっても、学校、教育委員会が放っておく、保護者に任せきりですよというのはあり得ないことですので、教育委員会として学校を含めてできることをやっていきたいというのはありますけれども、そこを超える部分については、保護者。学校選択制を選択するにあたっては、通学路の学校を選択するにあたって、通学路の安全、通学上の安全というのは基本的に親が子どもにしっかり指導していただきたいというのはあります。

教育長 こういうふうには書いてあるのは、何か今までは保護者の責任によらないのか。

五味原委員長 そうとれますね。

教育長 そういうふうにとれるのですよ。あくまでも学校選択をした以上は、子どもにそういう通学路の行き帰りの指導とかも含めて、これは親御さんが当然責任を負うのは当然のことです。でも、通学路として設定した場合の行き帰りの事故等についての保障というのは、教育委員会が保険をかけているわけですから、そういう意味でできます。でも基本的な責任というのは当然親によります。

ですからこういう表現をするときに、少しちょっと工夫する必要があります。当然、通学路の整備とか、外灯あるいはガードレールとかというような問題については、道路管理者と区と警察、それからPTA、地元の方々と協議をしながら、そういう安全対策は当然区がやっていくとこういうこ

とです。

学務課長 ここはちょっと私ども事務局でもいろいろ考えたのですけれども、要は今以上の案というのはなかなかないのではないかと。今、現行も保護者への責任という形をお願いはしていますし、教育委員会としても安全確保のための対策というのは、学校を含めてやっております。それをさらに一步踏み込んだ安全対策というのはなかなか出てきづらかったもので、一応現状もそうですけれども、基本的な考え方は現状と同じではないでしょうかということです。

横矢委員 先ほどから、地域に子どもを引き戻すというようなことがよく出ているのですが、何となく地域の子イコール通ってくる子というふうに偏っているような気がするのですが、住んでいるお子さんというのは、もう明らかに地域の子は地域の子なので、地域の方たちの意識を少し変えていただいて、通っている子と住んでいる子、両方ともうちの地域の子というふうに見ていただくと、子どもがふえてにぎやかになっていいという考え方もしていただけないか。通ってくる子だけ見るようなイメージになっているので、ちょっと違うのではないかと思うのです。通ってくる子がいれば、そこに住んでいる子もいる、みんな地域の子として、地域の方々に意識していただく。

通学路などについては、地域の子はわかりやすいですけれども、他地区に通う子どもたちの通学については、どういう経路を通られるのかとか、そういうところを主要なメンバーの方にお知らせして、ここも重点的に見ていただきたいとか、通学路をどう設定していくかなどをある程度メインの方にわかっていただくということができれば、少しでも何かプラスアルファできれば、完璧になどできるわけではないのですけれども、何かちょっと考えて足していっているというイメージがつけられるのではないかと、それが重要なことではないかと思えます。

澤委員 確かに通学路だけではなくて、地域との密着性といっても、赤坂の子も麻布の子も同じ港区なのだからというような大きな目で一つ見ていただきたいという願いがあるのです。

横矢委員 あと私立の子もです。地域でイベントをすれば、みんなが集まってきて、学校の壁を越えてというふうにできればいい。でもそこに入れるとしたら……。

小島委員 そういう寛大なというか、心広い気持ちでは、この問題解決しない。

横矢委員 ここに何かを入れるとしたら、もう近くに行けというしかないのかという感じですね。

五味原委員長 現実には、地域の方々から見れば、何か子どもたちを対象にしてやってもなかなか思うようには集まらないという部分があるのではないかと思えます。

横矢委員 ただ、一時期よりもまたイベントとかが戻ってきています。まちが再復興し始めている時期でもありますので、そんなに暗くなることはない感じです。

教育長 この資料によりますと、小学校でも5人に1人は私立に通っています。81.何%ですか。

澤委員 びっくりしました、改めて。

教育長 ですから本当に5人に1人は私立に通っているという状況を考えると、本当にもうオール港で考えていくしかないのではないかという気がします。

澤委員 今の通学路に関しては、学区域外から来る子どもたちにも何か推奨通学路みたいなのが

あるのですか。

学務課長 それは通学路については、基本的に学校の推薦を受けて、教育委員会が指定します。その通学路を通ってくださいと。

澤委員 隣接でもその通学路を通ってきなさいとそういうことになっているのですね。その途中で何か、たまたま隣接に行くから、信号があった方がいいとか何とかという要望があれば、教育委員会としてはそういう努力もできるという、そういうことですね。

五味原委員長 どちらにしましても、いかがですか。これは一度お持ち帰りいただいて、もう少しいろいろ検討していただき、また次回の委員会でも討議していただいた方がベターかと思うのですが、いかがでございますか。よろしゅうございますか。

教育長 ちょっと表現なのですけれども、基本的な考え方のところ、通学区域制度を原則として、学区域の学校に就学することが基本であると、何かちょっと表現を、学校選択希望制の見直しについて（案）という表題からすると、いきなりこういうのはちょっと違うのかという感じがします。

それから、学校選択制の中学校のところなのですけれども、公立学校への就学率向上を目指しというのは別に公立学校への就学率向上を目指すために学校選択制をやっているのではなくて、あくまでも魅力ある中学校づくりということです。それをすることによって、理解をされ、公立、港区立の学校への信頼度が増す。その中で就学率が向上するのではないかということなので、目的というのでしょうか。

五味原委員長 順番がちょっと違う。

教育長 この辺のちょっと表現も。

澤委員 私がよく強調しているから、それが学務課長の頭の中に。

教育長 これもまたどんどん改善されて外に出ていくと思いますので、その辺ちょっと改善していただきたいと思います。

五味原委員長 それではその件については、継続ということではよろしゅうございますか。

（２）社会教育の施策について

五味原委員長 それでは、次に移らせていただきます。

社会教育の施策について、生涯学習課長、お願いします。

生涯学習推進課長 本日のところは、継続協議でお願いいたします。

五味原委員長 社会教育の施策については、継続審議ということで、よろしくをお願いいたします。ほかに何かございますか。

「閉会」

五味原委員長 ほかにないということでございますので、以上を持ちまして、閉会といたします。次回、平成19年1月23日火曜日、10時から予定しております。よろしくどうぞお願いいたします。

(午前11時59分)

会議録署名人

港区教育委員会委員長

五味原 康

港区教育委員会委員

澤 孝一郎